

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 29 日現在

機関番号：32621

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12193

研究課題名(和文)近代ドイツ哲学における心理主義の系譜 カントとテーテンスを中心として

研究課題名(英文)Genealogical research on psychologism in modern German philosophy

研究代表者

辻 麻衣子(Tsujii, Maiko)

上智大学・文学研究科・研究員

研究者番号：40780094

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、主に以下の3点に集約される。1)『批判』演繹論の書き換え問題とその目的：カントが第1版でもくろんでいた、人間の認識諸能力内部におけるメカニズムの解明が第2版においても保存されており、その意味で第2版演繹論の目標は心理主義的議論の補強にあったのだということを示すことができた。2)テーテンスによる認識能力論の整理：テーテンスの認識能力体系の中で「想像力」「創作力」という能力が重要な位置を占めることが明らかになった。3)上記2)で着目したテーテンスの想像力、創作力という両能力の内実および両者の関係が、第1版演繹論でカントが示した「三重の総合」という着想に影響を与えていることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果がもつ学術的意義は、カントの認識論を「心理主義」という側面から見直し『純粹理性批判』超越論的演繹論の二つの版を比較検討することで、このテキストが当時受けた批判が、カント自身の目論見および意図に対応しない的外れなものであったこと、また、ここには同時代の哲学者であるテーテンスのきわめて心理主義的な能力論がその背景として影響しており、両版の違いもテーテンス、あるいは心理主義との距離をどのように取るかという観点の違いに帰しうることを示した点にある。また、これを通じて、18世紀後半のドイツ哲学における心理主義のありようについて、その一端を明らかにすることができた点も意義深いものである。

研究成果の概要(英文)：The achievements of this research are summarized as follows. 1) Kant's rewriting of the Transcendental Deduction of the Categories and its purpose: it was shown that two editions of the Deduction have a common purpose, that is, figuring out the epistemological mechanism and that Kant planned to reinforce the psychological argument of the former edition in the second edition Deduction.

2) Schematization of Tetens' epistemological faculties: through this schematizing, we found how two important faculties, namely, "Einbildungskraft" and "Dichtungskraft" work in Tetens' epistemological system.

3) Tetens' influence on Kant's psychological deduction: as the conclusion of this research, we illustrated that Tetens' two faculties showed above have considerable influence on the "threefold synthesis" in the first edition Deduction.

研究分野：近代ドイツ哲学

キーワード：カント テーテンス 心理主義 認識論 構想力

1. 研究開始当初の背景

近代から現在に至る哲学史を俯瞰するとき、「心理主義」と「論理主義」という対概念は、その趨勢を捉える上で欠かせないキーワードである。しかしながら、当の「心理主義」という概念によって名指される内実については、「心理学主義」「生理主義」と言い換えられることもあれば、これらと明確に区別されることもあり、そもそも「心理主義」という立場の定義そのものが非常に多義的である。内実が曖昧なままに用いられることで引き起こされたこのような混乱こそが、「心理主義」と「論理主義」という争いの元凶となってきたと言わざるを得ない。

さて、近代認識論の代表的著作である『純粹理性批判』(以下、『批判』)は、1781年に第1版が、1787年に第2版が刊行され、両版には若干の違いがある。著者であるカントが第2版にて書き改めたのは、自我、自己意識や内官など認識主観について詳述した部分に集中しているが、これは第1版でのカントの記述が「心理主義的である」と同時代の哲学者から評され、第2版はその誤解を解くことを目的としていたためであると言われる。とりわけ、認識構造を解明するにあたって外的な対象と自己意識を中心とした認識諸能力とがいかにして関わるかを論じた「超越論的演繹論」(以下、演繹論)は、そのほぼ全てが書き換えられた。結果として第2版演繹論は、認識諸能力の詳細な分析を排除し、認識における自己意識の働きを(「SはPである」というような)論理学における判断形式と直結させる形の叙述へと様変わりしたのである。

両版演繹論のコントラストは、上記の「心理主義と論理主義」を軸にした哲学史的背景のもとに置いてみると、なおさら際立ってくる。すなわち、「心理主義を強調する(、それゆえに批判もされた)第1版」と「論理学を強く全面に押し出した第2版」という図式がより鮮明に看取される。しかしながら、「心理主義」という立場がなぜ『批判』への論難として持ち出されたのか、そしてこれが論難として真に適当であったのか、また論理主義が「心理主義へのアンチテーゼ」となりうるのか、といった問題をめぐって、「心理主義」自体の解明が俎上に載せられることはこれまで無かった。言い換えれば、演繹論を中心とする『批判』の書き換えの問題に未だ見通しがついていないのは、背後にあるこの構図を踏まえた上での整理ができていないからであり、この点において「心理主義と論理主義」という対立軸を精査し直すことは、それ自体が一つの哲学的問題の解決になりうるだけでなく、『批判』周辺に特有の問題にとっても有益な営みであると言える。

以上のような問題背景のもと、本研究が中心に据える問いは、認識論における「心理主義」とはいかなる指向を意味するのか、というものであった。本研究は、この問いを『批判』を中心とするカント、およびこれに強い影響を与えたと考えられる同時代の哲学者、テーテンスの議論に基づきつつ詳らかにすることを目標とした。

2. 研究の目的

本研究は、イマヌエル・カント(1724-1804)の認識能力論を心理主義という観点から捉え直し、そこから取り出される心理主義概念がより広い哲学史的な文脈のもとで普遍的に持つ意味を詳らかにしようとするものであった。この研究においては、カントの認識論における態度決定に影響を与えたと考えられるテーテンス(1736-1807)の思想を参照することで、当時の心理主義概念を明確化し、またこの心理主義が、カントの生きた18世紀から現代に至るまで論理主義とのシーソーゲームを繰り返しながら連続と受け継がれる中で、概念として一貫したものであったのかを再考することで、心理主義と論理主義の調停に資する見解を提示することを試みた。

3. 研究の方法

以上の目的のもと、本研究は大きく分けて以下の3つの方法を採用した。

A)『批判』演繹論のテキスト検討

当該テキストの精読・検討を行った。その際に本研究では、「心理主義」の誹りを受けた第1版を重点的に扱うが、心理主義的要素を排除したと言われる第2版も対象とした。というのも、従来の先行研究では「悪しき心理主義からの脱却」という先入見を持って第2版を読み解くものが少なくなかったが、両版の書き換えをつぶさに検討することを通じて、カントが何をもちて第1版の叙述を心理主義という批判から救い出そうと考えていたかを浮き彫りにすることができると考えたからである。

B)テーテンスのテキスト検討

テーテンスの認識能力論が展開される主著『人間本性と其の展開についての哲学的試論』(1877年)の第1巻の精読を行い、彼の認識能力論の一部を明らかにした。その際、もう一つの主著『一般思弁哲学について』(1775年)や形而上学講義録(1789年)など近年入手可能になりつつある新しい資料も適宜取り入れた。これは、テーテンスは生前の公刊著作が上記の2冊のみである上に一次資料の大半が散逸しているため、その体系的理論が未だに不明であるが、この作業により見通しの良い理論図式が得られると考えたからである。

C) 上記 A) B) から、カントとテーテンスそれぞれのテキストにおける心理主義的側面を明るみに出し、両者の影響関係について分析した。上に述べたように、カントの標榜した超越論哲学はテーテンス流の心理主義からの脱却を企図していたが、果たしてそれが成功したのか、あるいはそもそもそのような企図自体がカントの念頭には無かったのかという問題に対し、このアプローチによって一定の回答を与えることができた。

4. 研究成果

上記 A) については、第 2 版演繹論テキストの内在的な検討を行った結果、カントが第 1 版で目論んでいた、人間の認識諸能力内部におけるメカニズムの解明が第 2 版においても保存されており、その意味で第 2 版演繹論の目標は「心理主義からの脱却」ではなく、むしろその補強にあったのだということを示すことができた。

B) については、テーテンスの認識能力体系の中で「想像力 (Einbildungskraft)」「創作力 (Dichtungskraft)」という能力が重要な位置を占めることが明らかになった。前者は、感覚から受け取られた表象を、それが途絶えた後に再生し、時間的に近接していたり、相互に類似している複数の表象を結びつけて再び眼前にもたらず能力であり、後者はこれまでに結びついたことのないような表象同士を結びつけ、新しい像を生み出す能力である。

C) については、上記 B) で着目したテーテンスの想像力、創作力という両能力の内実および両者の関係が、第 1 版演繹論でカントが示した「三重の総合」という着想に影響を与えていることを示した。当然のことながら、テーテンスの採用する図式がそのままカントの「三重の総合」に当てはまるわけではない。具体的には、テーテンスが考える認識諸能力があくまでも経験的なものであるのに対し、カントはそれらに超越論的な使用をも認めており、それによって初めて認識一般が可能になるようなレベルでの議論を提供している。第 2 版演繹論はこの超越論的側面を強調したものであり、そこでは第 1 版で語られていた心理主義的な能力論は無効化されたわけではないということを示すことができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 辻 麻衣子	4. 巻 27
2. 論文標題 「良心は決して誤らない」 1798年『道徳論の体系』における衝動と良心の問題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 フィヒテ 研究	6. 最初と最後の頁 23-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻 麻衣子	4. 巻 19
2. 論文標題 テーテンス・ルネサンスとカント 「三重の総合」に見る経験心理学への態度	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本カント研究	6. 最初と最後の頁 73-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 4件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 辻麻衣子
2. 発表標題 もう一つの『言語起源論』 テーテンスとヘルダー
3. 学会等名 日本哲学会第79回臨時大会 個人研究発表
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村井忠康, 辻麻衣子, 三上温湯, 木本周平
2. 発表標題 超越論哲学はなぜ論理形式を問題とするのか
3. 学会等名 日本科学哲学会第53回大会 ワークショップ
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 辻麻衣子
2. 発表標題 想像力と知性 異種なるものをつなぐ想像力の広がり
3. 学会等名 シンポジウム「想像力 とは何か? カントとシェリングの視座から」東京大学共生のための国際哲学研究センター (UTCP) (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 辻麻衣子
2. 発表標題 新カント派に還れ! 新カント派の黎明と興隆
3. 学会等名 哲学オンラインセミナー (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 辻 麻衣子
2. 発表標題 「良心は決して誤らない」 1798年『道徳論の体系』における衝動と良心の問題
3. 学会等名 日本フィヒテ協会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 辻 麻衣子
2. 発表標題 生産的構想力の三層構造
3. 学会等名 公開講演会「超越論的演繹」(招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 ユルゲン・トラバント、村井 則夫・斎藤 元紀・伊藤 敦広（監訳）、梅田 孝太、辻 麻衣子（訳）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 390
3. 書名 人文主義の言語思想－フンボルトの伝統	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------